



北村先生はドンドコ歩いて行くので私との距離は緩々と周って行く

何千歩も経過したであらう大木の森林帯の中を一人で歩いて行くのだ

ホウ、ホウと梟の啼く道を頑張って歩く……  
大木ばかりで空は見えないうち登山してゐる感じは全然無い

一合目から五合目迄は半合目毎に茶店あり

休憩毎に流茶が一杯いと集印中右の判が三つ  
倍す、増えて

行く

私が判

着する

時分には

北村君

は先を休

憩流流を

から「サア一行にさうとせきまてられる



私は少しの

休憩でまた

歩き出さぬ

は「あらな

事になる

二人を調子で

頂上直行する

をうかど心

配になって来る



半合を進むのに全く骨の  
折れし事な

私は危いのぞ元気を出さなく  
つちや... と嘆息つて歩く



三合半の茶店で昼食をする事に  
みそ汁と牛の罐詰を買って喰べ  
何とお腹のへった時程 ウマイ物はチッ  
歩いて汗をかいてから石の爲めにはこれ  
以上の薬はなごらう  
出発!

丁度私と同じ位の足どりの女が一人おた  
その女も本隊から遅れてマイペースで登山に



て汗くらしい。

旅は道ずれと去るが 富士登山に限っては

喋るべから

歩いて行く

と息が苦しく

な子ので

唯黙々と

歩いておるは

力である



四合目に海拔2450米迄  
 樹木は徐々に灌木に變  
 つて行く。木無境。を過ぎ  
 と五合目から半合の茶店  
 が荒くなって六合目七合目と



一合目毎に500mだが、その一合は極く短かくなり



上を向くと次の茶店が  
 見える位になって来た  
 私は元気百倍……  
 調子をつけて歩き出  
 した。今日中に頂上到着  
 も楽だと考へたら……



海拔10000尺<sup>米</sup>もの

富士山……

空気は皎々と

稀薄になる

ので泊りは

頂上より八分

目の方が良いと

の故に私達は

八分目の室に

泊まる事に決ま

る

時間的には幾

分早いとは





思ったが、明朝は御來光も  
拝みねばならず、午後四時十分、  
八合目の山口にはいた。……夕闇せまる、富士  
山頂… 澤山の山々を足の下に見る気持……  
何と壮快なものよ、と云いたくなる  
日は全く暮れた、山口のランポは五ツ四ツあり  
ない。夕食も半熟のご飯にみそ汁、お粗末な  
野菜の煮物、たかたか、咽喉は通らない  
山口は五時を過ぎると極寒である  
総勢60人の、70人位は泊っているだろう、男女  
も折重って寝るのだ



夜になつて、気温が  
 鋭々と下りポツリ  
 ポツリと雨が降  
 つて来た様子が  
 風の音も厳しく  
 聞こえて来た



バチバチバチと空の屋根  
 を打つ焼岩の音もはげ  
 しくなつて来た

ランプは一つ消しニツ  
 消し次々と消され  
 て行く  
 強力に負はれ  
 て△口に到着した  
 女学生もいた。  
 この調子が続くと  
 二日も三日も△口を  
 出られ



△口も知れず



胃腸の弱い人なら  
空気が稀薄に存する  
つれて吐気をもよお  
す人の真暗な山



の中でゲエーゲエーと声がかきこえて  
来る。それは凡そ10人位もある感じだつた  
ひと事やらぬ私もお腹が冷えて来てねむ水ま  
いどろが、お腹がじんじんと痛むようになって来た  
便所は表へ出て崖端から約一間程の板の橋  
のかかった向いの断崖の岩室の便所だ  
直黒けで恐い便所であるが何も仕方がない  
帰って来て整くすると又もよおして来る。都合  
三回も三回も橋を渡らざるを得ずかいた  
寒。せんべい布団の下に雨水が流れて来る  
ハコスを首に巻いて北村君にお願いついで  
……それでもいつの間にも寝てしまった